

FADO

27

Setembro 2000

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

一か月間の留守の間に、山積した仕事を片付け、「きまぐれライブ」のチケット発送、CD発送を中西睦子女士に急遽手伝ってもらいながら終了!

帰国して初めてほっと一息、久し振りに、狭いユニットバスに湯を張り、膝を抱える様に身体を浸す。それでも一応風呂だ。いつの間にか又雨が降り出した。帰国翌日の奈良ファンクラブ発足ライブの際、その仕掛人である林医師にいただいた虎の子30年物のモルトウイスキー“SPRINGBANK”を嘗めながらキーボードを叩いている。幸い薬が効いてきて頭痛もしない。

癌と戦っている黒田会長の事を思う。<5月6日(土)輸血の点滴を待ってもらい、3566回目の日刊スポーツ「ニュースらいだー」を書き上げる。ジャーナリストが自己発言の場を自分で閉じるのはつらいことだが、長期戦に耐え、危機脱出のきっかけをつかむことが大事だと、この回をもって10年以上続けてきた連載をしばらく休載させてもらうことにする。>と窓友新聞の7月号の病床日誌に綴られている。<大輸血作戦>を繰り返しながら下血、高熱と戦っておられる。黒田さんの“負けん気”に賭けよう。再び立上がり、あの笑顔を私たちにを見せてくれる日がくる事を祈ろう。

ファド倶楽部ジャーナルの発行は、東京、大阪でのコンサートが終わってからにしよう。今は、コンサートの事に集中しよう。焦ってやって良かったためしはない。若い頃のように無理が効かなくなった今日この頃、仕事を抱え過ぎて半発狂状態になるよりいいか。そう思うと、肩の荷が軽くなった。ひとりですることには限りがある。

アマリアの歌声に魅せられファドを歌いはじめた松田美緒さんから、ポルトガル語で書かれたメールをいただいた。20才、立命館大学の学生だ。京都の巴里野郎でのライブの時に会うことにした。会った瞬間、眩しい程の若さに私は目まいを感じた。生まれる国を間違えてしまった同類のにおいがした。長身の個性的な顔立ちをしたお嬢さんだ。私たちはとりとめもなく喋った。親子ほどの年の差も忘れて、いい気になって飲ませ過ぎた感もする。別れ際、「Um beijão」という彼女の声に、ポルトガル式に両頬にキスをして私たちは四条大橋のたもとで別れた。これからいろいろなものに出会い成長していくだろう。それでも、どうしてもファドが歌いたかったら、いつでも、声をかけてね。先輩として、同志として、惜しみ無く私の生き様を見せてあげる。

月田秀子の旅日記

NHK衛星ハイビジョン放送「一本の道—サウダーデの道」の撮影を終え、チューリッヒから関空までの帰国便はなぜかファーストクラスでの空の旅になった。往路のビジネスクラスよりも愕然と待遇が違う。未知との遭遇を察知されたか、いすの操作方法、足置きセッティング方法一通りの説明を聞き、態勢を整えた所に、闘牛士のごとく現れた小柄な搭乗員嬢、半畳ほどあるテーブルをパタパタと組み立てるや赤いテーブルクロスをサッと敷き、その上には黄色い一輪の薔薇。まずは1990年のTAITTINGERのシャンパンの金色に輝く気泡を舌先に感じつつ乾杯!向かいに恋人のひとりでもいればなどひとりごちながら、もう一杯。広げられたワインリストをみれば、フランス料理フルコースへの道しかない。ナイフもフォークもピカピカだ。ちよいとこっそりいただくなんてできそうもない。オードブルはオセトラキャビアのスコットランド産サーモン巻き、さらに30g入りのキャビアが一瓶がついている。(それは持って帰ろうとよけておいたら、いつの間にか冷蔵庫に保管しておいてくれた。)やはりウオッカを飲みたくなる。二杯お代り。Chablis Premier Cru 1997の白ワインで白身魚の料理を、赤ワインはPino Noir Loquette Sierre 1998、料理はドンペ産うずらの茸詰め。次なるワインは、Grain de Malice 1997、コクと深みのあるワインだ。ああ、この分でゆくと、会報7月号の原稿を書くどころではなさそう。最後に20年もののポートワイン、グラスをゆっくり滴り落ちる“Lagrime(涙)”を見つめながら、リスボンでの一か月に思いを巡らせる。「サウダーデ、会えないつらさ…もう一度聞かせて、あなたが恋しい—Tenho saudade de ti—その言葉を。」ひとりつぶやいてみる。結局スイスチーズの盛り合わせでダウンしたようだ。スープもデザートも食べた記憶がない。目が覚めると、テーブルの上に何と一杯のカルバドスが置いてあった。しっかり注文して眠ってしまったというわけだ。ああ、この快適さを、きっとこのあとの人生でも二度と味わえない快適なファーストクラスでの空の旅を、満喫しよう。もう原稿を書く事なんか忘れていた。カルバドスを一気に飲み干し、ほとんど水平になったリクライニングシートの上で眠りについた。朝食のセッティングの為、開けられた窓からの光で目を覚ましたのは、日本に到着予定の2時間前の事だった。帰国後の殺人的なスケジュールを想像して、私は一挙に現実引き戻された。旅人であり続ける事はできない。人はいずれ生活者として日常に帰ってゆかなければならない。さよなら、リスボン。そして、二度とないだろう快適なファーストクラスでの旅よ。それにしても、新婚旅行はエコノミーにしよう。ファーストクラスのシートでは愛をささやいたり、手を握り合う事さえ不可能なのだ。まあ、相手がいればのことだけだ…。

月田秀子のポルトガル紀行 —ファンそして友情のありがたさを痛感した夜—

今回の旅で、何度となく、ファドのライブで、友人のパーティーで、歌った。その度に、驚く程の熱烈な拍手が返ってきた。涙を浮かべながら聞いてくれた人もいたし、歌っている私と、ギタリスト(かつてのアマリアのギタリスト、フォンテス・ロシャ)のスケッチをいたずらっぽく目で渡してくれた若者もいた。が、とてもつらく哀しい想いで、帰路についた夜が二度あった。

一度目、それは、アルファマにある「Bacalhau do Molho」という週2度だけファドライブをしている店でのことだった。レコード店アマリアの社長マヌエル・シモンイシュが連れて行ってくれた店だ。そこは、かつて、Tia Lóがあった所で、わたしが初めてポルトガルで歌った思い出あふれる店だった。マヌエルのリクエストで『涙』を歌った。客の反応は冷やかかだった。ギタリストが気にして、明日自分が弾く店があるから、あらかじめちゃんと音合わせをしてから、そこでもう一度歌ってほしいと言ってきてくれた。9年前にSão Caetanoで弾いていたギタリストだった。気持ちは嬉しかったが、原因は、ギターではなかった。その店は、マリア・ジョアン・クワドロのファンが彼女の歌を聞きに来る店だった。彼女は、退廃的なムードを漂わせたファドうたいだった。彼女の歌に人々は限りない拍手を送った。『涙』の最初の間奏の時に聞こえた彼女のハミングは、それ以降の間奏では入ってこなかった。私は招かざる客である事を感じた。日本のファンの人達のありがたさをつくづく感じた夜だった。

ベッドの上でひとりしよげ返っている私の姿を見て、フェルナンダは「マリア・ジョアン・クワドロが、“Numero Um”で歌った時、秀子の歌にあれだけ沸いた観衆が冷やかな反応しか見せなかったのを覚えている?」と私の顔を覗き込みながら、いつもはしゃいでいる彼女には珍しい程の真顔で尋ねた。「彼女の歌が、それによってどんどん生彩を失っていった時の事を。あなたの魂は、高いところにある。ポルトガル人を感動させるのは、あなたがその魂を震わせ歌っているからなのよ。そして、あなたのその声は、あなたにしかないもの。」そして、最後に「さながら神の(FOI DEUS)」の一節を、口ずさみ、ニッと笑って、部屋を出て行った。「私にはわからない。誰にもわからない。なぜ私はファドを歌うのだろう。悲しみと涙のにじむこの調べを。苦しみながらもなぜ歌うのか。歌うことで、内なる魂が安らぐのがわかるのです。それは、さながら神の思し召し。瞳に輝きを、薔薇に香りを、太陽には金の色、月には銀の光をさすけたのは。さながら神の思し召し。心の痛みを和らげる為、歌い、涙するこの私。ああ、この声を私に与えてくれたのは…。」ありがとう、フェルナンダ!

もう一度は、6月17日『GRANDE NOITE DE FADO(ファド大祭典)』で歌った夜のこと。12年前、ゲスト出演し、歌い終わったあと、天井桟敷までぎっしり埋まった6000人の観衆のどよめくような歓声、立上がり拍手を送る人達の前で、震えながら、呆然と立ち尽くしていたあの時。その体験が12年間私を支えていたとも言える。その後改装されたのか、整然と並んだ椅子に、観衆はまばらだった。観衆のほとんどが自分の地区の代表を応援する為に来ていたという感じ

だった。ゲストとして招かれた往年の歌手に対しても、観衆の反応は冷やかかだった。私が歌い終わった時も同様だった。舞台の袖で出番を待っていた男性歌手人気ナンバーワンのアントニオ・ピント・バスタが「おめでとう」と声を掛けてくれた。舞台裏にひきあげるやいなや、ギタリストのエドガーが私を抱き締めて離さない。「ヒデコ、今度一緒にレコーディングをしよう。僕は君が大好きだ。君は素晴らしい。このファドの祭りを国際的にしてくれた旗手なのだから。」どんな言葉も空しく響いた。一刻も早く舞台衣装を脱ぎたかった。その場を立ち去りたかった。劇場を出る時ひとりの婦人が、「とても感激しました。」と抱き締めてくれたのがたった一つの救いだった。

翌日、昼食に招いてくれたギタリストのレロにそのいきさつを話すと「世代が変わったんだよ。それと、関わっている連中が問題だよ。あれじゃ、すたっていくのも無理ないさ。ヒデコにとって、そんなことはどうでもいいことさ。気にすることないさ。君のころは、そして歌はもっと大きいんだ。僕はそれを知っているさ。」彼のその言葉は私の心の中の霧を一気に晴れさせてくれた。私は言った。「レロ、又、いつか日本でコンサートしようね。今度は大阪だけじゃなく、北海道、東京、九州…、日本のあちこちでね。」切なる思いは、きっと実現するとひたすら自分に言い聞かせながら。「もちろんさ!」車のハンドルを叩きながら、飛び上がるように彼は答えた。

『サウダーデの道』への道すがら

ポルトガルの乾いた夏の陽射に肌をじりじりと灼かれながら、たくさんの方のポルトガルの友人達のアドバイスを天の声と、すぎる思いで聴き、長い迷路を脱出したと思ったら、そこは日本だった。日本人である事から逃れるように、南蛮の国への道を探していたというのに。サウダーデの入り口は、日本から始まり、出口は日本だったというわけだ。

『サウダーデの道—Caminho de Saudade』と題したNHKハイビジョン放送の番組制作のロケのため、5月22日、私は、チューリッヒ経由のスイスエアーで関西空港をリスボンに向けて飛び立った。はじめてのビジネスクラスでの空の旅は快適だった。搭乗員の対応も、エコノミークラスの時より数段うやうやしかった。座席は広いし、足も伸ばせたし何よりも、まずシャンパンがただというだけで大喜びの私がそう感じただけかもしれないが…。マールがやたら美味しく、3杯目の注文に「お好きそうですね」と搭乗員嬢がにやり。

NHKのロケ班は29日に、今回の旅の相手役のアナウンサーの結城嬢は6月4日にリスボン入りするため、それまでは自由行動ということになっていた。とはいえ『サウダーデ』の文字が頭を離れず、まず、空港に迎えに来てくれたフェルナンダに、それから会う人ごとに「あなたにとってのサウダーデは?」と尋ね続けた。フェルナンダは、「今、夫がモザンビークに出張してるから、何よりも彼が恋しい。昔は、波止場、今は空港に行けば、帰ってくる人を待つ人、旅立つ人を見送る人の中にサウダーデを見付けられる筈よ。」とゆう答えが返ってきた。

(次頁へ続く)

ensaio

日本を離れる3日前、久しぶりに「生きる」シリーズの長崎での講演会で一緒した五木寛之氏が講演の中で韓国の〈恨(はん)〉という言葉に触れられ、それは、一つの民族の歴史の中で紡がれてきたそこはかかない悲しみの記憶。一つの民族の精神の深みに宿る文化といってもいいものだろうと話されていた。それはロシアでの〈トスカ〉(二葉亭四迷はそれを『ふさぎの虫』と訳した)、中国でいう〈暗愁〉、ポルトガルの〈サウダーデ〉にも通じる感情、人間誰しもが生きてゆく中で必ず背負っているものではないかと。

出番を待つ舞台の袖で、必死に書き留めた一節。それは非常に説得力を持って心に響いた。CD『オブリガダ、アマリア』の冒頭に、私が寄せた文章と異常に重なり合っているのに気が付き、驚いた。人間のDNAに刻まれた悲しみという名の遺伝子…。私が語るとどうも軽すぎて隙間を埋めるための言葉が欲しくなる。ホテルの部屋でひとり寝ても覚めても、歯を磨いていても、シャワーを浴びていても、食事をしていても、飲んでいても、リスボンの街を歩いていると、その言葉が頭をかすめる度に、紙切れにそれらを書き留めていった。その為に、何度ベッドからはね起き、トイレから飛び出していった事だろう。年のせいとか、せつなく浮かんだ言葉が、ものの見事に、次の瞬間に消えてゆき、その為に、じだんだ踏む事が最近多くなった結果出た教訓だ。ファドを本格的に歌いはじめて12年、「サウダーデとは?」と問い続けてきた筈なのに、こんなに真剣に「サウダーデ」と向かい合ったのは初めてだった。

私の乏しい語学力でもって、アナウンサーの結城嬢の質問を、ある時は、アルファマの木立ちの影で憩う黒装束に身を固めた老婆に、窓から顔を出すおばさんに、カメラを向けられはしゃぎだすカタツリ売りのカルメンリンダおばさんに、ファドを生きがいとして生きているマヌエルじいさんに、わが友ジョアンに、アマリアの墓参りに来ている女性に、自分の息子を癌で失った老婆に、やつぎばやに根掘り葉掘りのそれらの質問をするのは、苦痛だった。それぞれのサウダーデを引き出すための余りにも酷な質問は、私の心を痛ませた。質問される人の思いを感じれば感じる程。サウダーデは、それぞれの人の心にそっと息づいているものだと思うから。カメラを向けられ、マイクを向けられて語れるものではない。

熱烈な私のファンのジョアンも、ファドを愛してやまないマヌエルもごく自然に、思いの丈を語ってくれた。取材後、ジョアンは不安そうに尋ねた。「秀子、これで良かったかな。何をいったか覚えてないけど、ちゃんと伝わっただろうか?」カリエスに冒された不自由な手で、失明した臉の裏に焼き付いた、ルアンダでの思い出をたどりながら、画帖にむかうジョアン、まるで詩を朗唱する様に語る時のあなたのひたむきな姿は、どんな逆境にも、決して失うことのない人間の尊厳に満ちあふれていた。遠く離れたポルトガルに私は素晴らしい友人を持っている。心にそんな友へのサウダーデが広がってゆく。その思いを抱きながら、私は、歌い続けている。

notas

サウダーデ Saudade

語源はラテン語のsolitudo(m) (孤独)であるが、ポルトガル語で〈孤独〉は通常solidãoという。サウダーデは日本語では〈懐かしさ〉〈未練〉〈懐旧の情〉〈哀惜〉〈郷愁〉〈ノスタルジー〉〈孤愁〉などと訳され、英語では例えばlonging, yearning, ardent wish or disire; homesickness, nostalgiaなどなどの訳語が与えられている。しかしいずれの訳語もサウダーデの表す多面的な意味のいずれかの面に対応するものであって、それが持つ意味の総体を示す訳語ではない。サウダーデはまことに外国語に訳すことの難しい語である。事実、ポルトガルの人々は、サウダーデはいずれの外国語にも訳すことのできない、ポルトガル語にのみ(神から?)与えられた〈特権的な〉一語であると言って誇りにしている。

しかし外国語に訳すことができないといっても、サウダーデの表す意味のすべてを一語で訳すことができないということであって、この語の意味を説明することは可能、したがって理解することもできる。そしてこの語の意味を理解することが重要であるのは、この語がポルトガルの人びとのメンタリティを理解する為のきわめて重要なキーワードの一つだからである。

サウダーデとは、自分が愛情・情愛・愛着を抱いている人あるいは事物(抽象的なものも含む)が、自分から遠く離れ近くにいない、またはない時、あるいは自分がかつて愛情・情愛・愛着を抱いてい

た人あるいは事物が、永久に失われ完全に過去のものとなっている時、そうして人や事物を心に思い描いた折に心に浮かぶ、切ない・淋しい・苦(にが)い・哀しい・甘い・懐かしい・快い・心楽しいなどの形容詞によって同時に修飾することのできる感情、心の動きを意味する語である。そこには、たんにそうした人や事物を思い描いた時に心に浮かぶ感情だけでなく、そうした人や事物をふたたび眼の前にしたいと願う思いも含まれている。サウダーデはこのように複雑で豊かな内容を持つ語であるから、外国語で一語によってその意味を表すことは不可能であることも、訳語として挙げられている種々の語が意味の一面しか表しておらず思い出す対象によって訳語が異ならざるを得ないことも、明らかであろう。

〈中略〉

ポルトガルの民衆の愛するファドの歌詞のなかでも、このサウダーデは〈愛〉〈別れ〉〈涙〉などとともに最も頻繁に用いられる一語である。また長い歴史をもつポルトガルの叙情詩で扱われるテーマの一つも、いつの時代にあってもこのサウダーデで、すでに13世紀の叙情詩の中にも〈別離の悲しみ・惜別の情〉の意味でsoidade(saudadeの古形)という語が用いられている。

(文:池上岑夫「スペイン・ポルトガルを知る事典」より)

cartas

●7月1日、東京の暑い暑い30度を越える気温の中で、横浜の斉藤さん主催で銀座の「アルテレーベ」という何とも不思議な雰囲気をかもしだしている素敵なお店でダイナーコンサートがあり、私の友人、藤井昌子さん、埼玉県立高校の教頭で、様々な生徒の問題を抱えていて忙しい中、一度ファドを聞いてみたいという彼女と共に、北海道から駆け付けました。

同席した、甲府からいらした磯野さん、ファドに関しては第一人者の横山さん、相沢さんと、ファドの話で盛り上がり、ポルトガルのワイン美味しい食事で、私の胃袋はご満悦。そして、いよいよ、ピアノの上の仄かに怪しく揺れる燭台のろうそくを背に、静かに月田秀子さんのあの声が音量豊かに始まり、目をつぶり聞き入る私の心を満たしていったのです。…が、アレっ!! 今までになく元気で、お茶目で、たどたどしい会話に私たちは失笑を禁じ得ず、会場は和やかな雰囲気にも包まれてゆきました。今回のNHKの取材の話を変えながらのファドを聴き、リスボンの町の情景が浮かぶようで(私は、一度も行ったことがないのですが…)楽しい一時は、もう終わりですか!と思うくらいあっという間のコンサートでした。藤井さんの「素晴らしい、よかった。」の一言に私は、ニマーっと笑うだけの返事でした。

今回は北海道を離れ、東京まで出向き月田秀子ファン倶楽部の方たちと話ができ、何とも言えず姉弟、兄妹たちに会ったような気持ちでした。ファドがとりもつ友情に出会えたことに、何と日本は狭くなったことかと思ひ、月田さんのファドは日本人が今なくしかけている友情の絆を一本の道として、つくってくれる大きな役割を果たしてくれている事に感謝しました。そして、これから益々の活躍の場を全国の月田ファンがつくっていかうという意識を持つ事を真剣に考えてゆきたいと思うようになりました。

月田さん、横浜の斉藤さん、たくさんの出会いと思い出をありがとうございました。

<追伸>

10月は北海道公演ツアーとして、札幌を始め富良野、帯広等6か所でのコンサートを企画すべく奔走しています。燃える秋の北海道は、筆舌尽くしがたい素晴らしさです。ぜひ、月田さんのファドと共に北海道の秋を満喫しに来て下さい。お待ちしております。

(北海道ファンクラブ 千田尚子)

(千田さん、あなたのような人が私の身近にいたら、どんなに助かるだろうと思う。雑用から開放されて月田はもっと羽ばたけそうな気がする。えっ、雑用が増えるって?)

●5月2日、新しいCDを受け取りました。有り難うございました。素晴らしいライブ盤!曲が進むにつれ、ぐいぐいと盛り上がり、波に呑み込まれて行くように感じられました。特に後半に入ってから鳥肌モノで、アンコールの「友は遠く」まで聴いたところで涙が出てきました。まさに入魂の一作、と言うとあまりにも月並みか。まあ、どう言っても言葉では表せませんが、一曲一曲に尚一層の思い入れが感じられ、新境地の感さえあります。前作、前々作も素晴らしかったが、今回のCDは、アマリア追悼の形を借りているとは言え、月田ファドのひとつの到達点を示したと言えるのではないのでしょうか。これぞアマリアから引き継がれた歌の心に根ざし、そして確立された月田スタイルのファドと言うべきものなのでしょう。ところで、いつもながら野上さんのハーモニーは本当にカッコイイですね。アマリアの足跡をめぐるプログラム構成も、波の音に始まり終わるCDの演出も心憎い。これから何度もじっくりと繰り返し聴かせていただきたいと思います。

このCDのコンサート、去年の11月17日も行けなかった。行きたかったなあ。そのころ私は仕事で日本にいなかった。残念。こうしてライブ録音を聴いてますますそう思う、この記念碑的コンサート。こんなのはもう二度と無いだろうなあ、なにせ一度きりのアマリア追悼だからなあ… (大阪・S・H)

(思い切ってCDにして良かったと思う。完璧さとは程遠いけど、その時にしかできないことであると思う。まあ、その連続だけども、私の生き方は。)

●昨日は、何から何までお世話になりました。良い歌とお話で、秀子さんの人間性に感動しました。私は、酔っ払って、ステージまで上がってしまい、今考えるとお恥ずかしいです。お酒は、3杯までにしておきます。今も、秀子さんの低音の響きや情熱的な部分(「暗いはしけ」の「アー」のところなど)が心に響いてきて、感動さめやらず、という感じです。また、MCの時の素直で飾らない言葉がとても魅力的でした。まだまだわかっていないことだらけですが、ひとつよろしくお願いします。雑用があれば、私ができる範囲でお手伝いしますので言ってくださいね。本当に素晴らしい出会いができたなあ、とジーンとなります。

Que bom que você existe, estou agradecendo a vida que deu-me este encontro com você. 日本語では十分でないこの感動!!

(京都・松田 美緒)

(年の離れたわが同胞よ、ひたすら自分の心に正直に突っ走ってごらん。あなたのファドに気付いた時、あなたは素晴らしいファド唄いになれる。その時、年老いているだろう私は、あなたにバトンタッチしよう。)

お知らせ

1ページ目でご紹介しましたNHK衛星ハイビジョン番組『一本の道—サウダーデの道』の放映日は、7月24日(火)夜10時~11時です。

(ハイビジョン受信契約してない方は、いずれ、NHK・BSもしくは総合テレビでの再放送をご覧ください。

放映予定は未定ですが。)

ficção

読切連載

秀子のエピソード帖 ー黒いリボンの秘密ー

内間 天馬

阿倍野の「明治屋」で一杯やっていると、常連のチョーさんが入ってきました。本名、橋本典夫、ドリフターズのリーダーと同じ顔をしているもんでチョーさん。とっくに引退されて悠々自適のこのチョーさん、おもむろに懐からMDプレーヤーを取り出し、何やら聴きながら冷や奴で一杯やり始めました。いいですねえ。昼下がりの静かな居酒屋でヘッドホーン、そして晩酌…まことに幸せそうであります。でも知らなかったなあ、チョーさんが音楽好きだなんて。で、チョーさん、ナニを聴いてるんですか?「ストリングスで映画音楽じゃよ。わしは、ジャズでもクラシックでも何でも聴くよ」。へー、懐メロじゃないんだ。ところで、月田秀子って知っています?「ああ、知ってるよ。ファドの歌手だろ。テレビで観て以来ずっと興味はあるんだが、CDを買って行って店にはなかったから、多分出してないんだらう」。すでに5枚ほど出てますよ。「エーッ、ほんまかいな!すぐ欲しいから、等身大のポスターの付いてるヤツおせーて!」

話は突然、阿倍野から20年前のパリに移ります。かねてから知り合いだった、飛び切りファッションナブルなそのパリジェンヌの部屋を訪ねた僕に、彼女は、衣装タンスの中を見せてくれました。その衣装のあまりの少なさに驚いた僕は彼女におしゃれの秘訣を訊ねました。その答えが「人の真似をしないこと。小間物を工夫

して活用すること」。先日の大阪のバナナホールでの月田さんのコンサート。後半の彼女の衣装を見て驚きました。いつも決まって黒のドレスなのに一転白のドレスでした。僕がびっくりしたのは、彼女が首に巻いていた黒のリボンなんです。柔道の黒帯を舞台衣装にするなんてまさに小間物の立派な活用じゃないですか。月田さんって、ブランドものに縁がなくて、あまり衣装持ちじゃないって聴いてます。いろいろ苦勞してるんでしょうね。とっさに、思い出したのは「007ーロシアより愛をこめてー」のワンシーン。ダニエラ・ビアンキ扮するソ連の新米女スパイが、月田さんのよりももっともっと細いのを首に巻いていたんです。忘れもしないあのベッドシーン…。月田さん、あの黒帯、年末のリサイクルで、もういっぺん着けてみませんか?皆さんはその前に上記の007をビデオ屋さんで借りて観てください。歴代のボンドガールのなかで彼女が一番で、黒のリボンが最高の衣装ってのがわかると思います。あんまり関係ないか、この話。

バナナホールって、客席の後ろにバーがあるんですね。呑み助には有り難い。十数年ぶりに行ったもんで道に迷いました。ナビオの裏の交番で道を尋ねたついでにおまわりさんに聞いてみたんです。「月田秀子って、知ってます?」知らないってんで、月田さんのことやらファドのことしゃべったもんで開演に遅れちゃった。月田秀子を知ってるチョーさん、あんたはエライ!

(黒帯って、柔道の?あれはね、黒のショール、念のため。 月田)

vamos cantar!

私の手

山だったのか
海だったのか
諸々のことだったのか
私には わからない
様々な経験を経ても
あなたには 巡り合えなかった 巡り合えなかった

あなたを 待ち望み あなたを呼んでいた
探し歩いて 道に迷ってしまった
黒い雲だったのか 猛る海だったのか
あなたがゆえの私だった あなたがゆえの私だった

共に生きてきた手 これが その手
この手だけが あなたに告げるだろう
深い悲しみに由来するのか 大きな喜びに由来するのか
私の魂は 私の魂は

こんな状態では あなたを呼べはしない
私が行くところへ いらっしやいと

私を得たものは 苦痛を味わう事
気高くも 失われた夢によって
一私の恋の 私の恋の
何とも悔やまれる魅惑によって

AS MAOS QUE TRAGO

Letra : Cecília Meirelles
Musica : Alain Oulman

Foram montanhas?
Foram mares?
Foram os números?
Não sei.
Por muitas coisas singulares,
não te encontrei, não te encontrei.

E te esperava, e te chamava,
e entre os caminhos me perdi.
Foi nuvem negra? maré brava?
E era por ti, e era por ti!

As mãos que trago, as mãos são estas.
Elas sozinhas te dirão
se vem de mortes ou de festas
meu coração, meu coração

Tal como sou, não te convido
a ires para onde eu for.

Tudo que tenho é haver sofrido
pelo meu sonho, alto e perdido,
— e o encantamento arrependido
do meu amor, de meu amor

[註] ブラジルの女流詩人セシリア・メイレルスの詩。原題は「天への道の歌」

informação

- 月田秀子ファド倶楽部の黒田清会長が、7月2日一旦退院されたそうです。まだまだ余談を許さない状態だそうですが、反戦、反差別の戦いに加えて、病との苦闘の日々が続く会長に、少しでも心安らぐ時が送れるよう祈るのみです。見舞いに行った別れ際の一言、「早く良くなって、『とよ』で一杯やりたいな」実現することを信じています。
- 地震列島の日本、三宅島の噴火も気になりますが、大阪のきまぐれライブの際、有珠山噴火災害見舞いのカンパを呼びかけたところ、50,591円のお金が集まりました。ご協力ありがとうございます。美味しいイクラ丼をつくって下さった洞爺湖温泉の方々が避難している洞爺村の鈴木さん宛に送らせていただきます。
- 奈良の王寺の馬場さんの呼び掛けで、奈良ファンクラブが6月発足しました。2か月に一度、「アンデルセン」というアートギャラリーでライブをしてゆく予定です。奈良在住の皆様、ぜひ聴きにきて下さい。

<月田秀子のスケジュール>

7月	1日 (土)	東京・銀座「アルテリレー」	
	2日 (日)	神奈川・藤沢「INTERPLAY」	
	3日 (月)	東京・日暮里「和音」	
	9日 (日)	大阪・堂山町「バナナホールきまぐれライブ」	
	19日 (水)	奈良・王寺「アンデルセン」	*問合せ : 0745-31-4679
	27日 (木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
	29日 (土)	大阪・豊中「YOU-JINN HALL」	*問合せ : 06-6840-3840
	31日 (月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
8月	2日 (水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
	11日 (金)	横浜・本町「ラバロクラブ」	*予約問合せ : 045-713-6277 (斉藤)
	12日 (土)	神奈川・藤沢「川合邸」	*予約問合せ : 045-713-6277 (斉藤)
	28日 (月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
	31日 (木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
9月	6日 (水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
	10日 (日)	大阪・上六「長安寺-観月のタペー」	*問合せ : 06-6761-4022
	15日~19日	東京<マカオ政府観光局イベント>	
	20日 (水)	奈良・王寺「アンデルセン」	*問合せ : 0745-31-4679
	21日~23日	九州<マカオ政府観光局イベント>	
	25日 (月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
	28日 (木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
10月	5日 (木)	北海道・旭川「旭川市民会館」	*問合せ : 011-773-0121 (千田)
	6日 (金)	北海道・札幌「ジャスマックザナドゥ」	*問合せ : 011-773-0121 (千田)
	7日 (土)	北海道・恵庭「恵み野リサーチビジネスパーク」	*問合せ : 011-773-0121 (千田)
	9日 (月)	北海道・札幌「珈琲堂」	*問合せ : 011-773-0121 (千田)
	10日 (火)	北海道・釧路「釧路生涯学習センター」	*問合せ : 011-773-0121 (千田)
	11日 (水)	北海道・帯広「JRノースランドホテル」	*問合せ : 011-773-0121 (千田)
	26日 (木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
	28日 (土)	東京「ファドのタペ」	
	30日 (月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
11月	1日 (水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
	11日 (土)	長野・小諸「小諸ユースホテル」	*問合せ : 0267-23-5732
	12日 (日)	岐阜・高山	*問合せ : 0577-34-1852 (今川)
	15日 (水)	奈良・王寺「アンデルセン」	*問合せ : 0745-31-4679
	27日 (月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
	30日 (木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
12月	2日 (土)	大阪・桜橋「サンケイホール TSUQUIDA HIDEKO FADO CONCERTO 2000」	*問合せ : 06-6345-5062
	19日 (火)	東京・銀座「博品館劇場 TSUQUIDA HIDEKO FADO CONCERTO 2000」	*問合せ : 06-6345-5062
	25日 (月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
	28日 (木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535

<編集後記>

なんとも生きにくい世の中になったもんだ。そんな時こそ真剣に生きることに思い巡らせることができるのかもしれない。もたれかかる関係ではなく、危うくも己の足で立ち、歩く時こそ、人の愛のありがたさを感じるのかも。しけた煎餅をかじりながら遅ればせながらの7月号お届けします。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.asahi-net.or.jp/~wc3k-smz/FADO/menu.html>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第27号
- 2000年7月1日発行 (季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808